NOTEBOOK

あるべき未来に進むために

A 普通横罫 40枚 ノ–200PX

NOVEL

余話　肖像画

芳流（kaoru）

https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=19274078

ダイの大冒険, ヒュンケル, マァム, ヒュンマ, 原作終了後

このシリーズ最後のおまけ話。
本編の大筋とはあまり関係がないので、未読でも問題ありません。
「後日談　ネイルにて」novel/17922636のあとの話なので、ヒュンケルはネイル村移住済み、マァムと暮らしています。
「本編　７」novel/15406332と強いつながりあり。
「村のくらし」とも強く繋がっていますし、若干のモブも登場しますが、こちらのシリーズなので、モブの名前は伏せています。

この物語唯一の犠牲者に対する追悼。

これで、このシリーズは完全に終了です。ここまでお付き合いいただき、ありがとうございました!!

余話　肖像画

　ヒュンケルが１日の仕事を終え、自宅に戻ると、すでにマァムは先に帰宅していた。
　マァムは夫の姿を認めると、笑顔で出迎えた。
「お帰りなさい、ヒュンケル。今日もお疲れ様。」
「ああ。」
　家に帰ってきて、誰かが出迎えてくれるというのは、ほっとする。
　ネイル村でマァムと暮らすようになって、数ヶ月。
　長くひとりで暮らしてきたヒュンケルにとって、この習慣はまだ慣れないところもあったが、気恥ずかしくも、心地よかった。
「疲れたでしょう。お茶を淹れるわね。座ってて。」
「ありがとう。」
　ヒュンケルがダイニングテーブルにつくと、ふと、テーブルの上に、見慣れない帽子があるのに気付いた。
　ヒュンケルは、マァムに尋ねた。
「マァム、これは？」
　キッチンからひょっこり顔を出したマァムは、ヒュンケルがテーブルの上に視線を止めているのに気付いた。
「ああ、それね。
　教会から預かってきたの。
　今度のお祭りで使うみたいなんだけど、ほつれているところがあって、直してほしいんですって。」
「そうなのか。」
　少しすると、マァムが２つのマグカップを手にキッチンからやってきた。カップの口から、ほんのりと湯気が立ち上る。
　マァムはヒュンケルにカップを手渡すと、自分もテーブルについた。
　そして、カップをテーブルに置くと、テーブルの上の帽子を手に取った。
　大きなブリムと、尖ったトップクラウン。典型的なとんがり帽子

だ。
　マァムは、その帽子をひっくり返すと、ブリム、つまりつばと、クラウン、つまり本体との間の境目をヒュンケルに見せた。
「ここがほつれて穴が開いているの。ここだけ縫えば、また使えるから直そうと思って。」
　そう言って、マァムは帽子をまたひっくり返すと、頭にかぶって見せた。
「魔女の帽子ね。子どもたちがかぶると可愛らしいわね。」
　そういって笑うマァムをヒュンケルは、笑みを浮かべて見つめていた。
　彼は、目を細めると、感慨深げにつぶやいた。
「懐かしいな。」
「え？」
「・・・昔、こんな帽子をかぶっていた奴がいた。」
「そうなの？」
　マァムは、帽子を取ると、手にした帽子をしげしげと見つめた。そして、軽く首を傾げた。
　そんなマァムの様子に、ヒュンケルは笑みを漏らした。
「マァムは覚えてないだろう。小さかったからな。
　俺と先生が旅をしていたときに、同行していた奴が、そんな帽子をかぶっていた。
　この村にも一緒に来たな。」
「そうなんだ。」
　マァムは感心したようにうなずいた。少年だったヒュンケルが、アバンとともにこの村を訪れたときのことは、レイラや、他の大人たちからも聞いていた。
　だが、さらに一緒にいた者がいたという話は、レイラもしていなかった。そう、アバンもだ。
　このときは、マァムはまだその違和感に気付いていなかった。
　ヒュンケルは淡々と言葉をつづけた。それは、想い出を語るというよりも、過去の出来事を説明すると言った方がいいような口調だった。
「人間ではなかった。

モンスターだ。」
「え？そうなの？」
「ああ。ゴーストだった。
　リンガイアとベンガーナの国境付近で悪戯をしていたところを、先生が説得してやめさせたんだ。それから、なんとなくついてきてな。」
　その様が目に浮かぶようだと思い、マァムは、くすりと笑みをこぼした。
「先生らしいわね。」
　マァムは興味を覚えて、その先をヒュンケルに促した。その先にどんな言葉が待っているのか、彼女は全く想像していなかったのだ。
「その子は、いまはどうしているの？」
「・・・殺された。」
「えっ。」
「おそらくは、ミストバーンに。」
　マァムは、ヒュンケルの言葉の意味が理解できなかった。あまりにも意外過ぎるその内容に二の句も告げず、呆然としていた。
　ヒュンケルは、マァムから目を逸らし、テーブルに視線を落としたまま言葉をつづけた。極力感情を交えないようにしているのだろうか、その言葉は、ひどく淡々としていて、無機質だった。
「俺も、あのときのことは、よく覚えていないんだ。夢の中の記憶のようで。
　この村を出てすぐのことだ。
　俺が、初めてミストバーンと会ったときだった。
　あいつは、ミストバーンに捕らえられ・・・そして、消えた。」
「ヒュンケル・・・。」
「あのときは、何が起こったかわからなかった。俺もまだ幼かったからな。
　だが、いまならわかる。
　あいつは・・・バケルは、ミストバーンに握りつぶされたんだ・・・。ゴメのように・・・。
　おそらくは、暗黒闘気が俺の身体に馴染むように・・・俺の憎し

みを掻き立てるために。
　・・・それだけのためにな・・・。」
　ヒュンケルは、ぎりっと唇を噛んだ。
　マァムは、いたたまれなくなり、立ち上がると、ヒュンケルに歩み寄った。そして、その背後に立つと、彼を後ろからそっと抱きしめた。彼女は何も言わなかったが、彼に対する精いっぱいの慈しみと心遣いであることはヒュンケルにもすぐに分かった。
　言葉はなくとも、ただその凍える心を温めるかのように回された腕の温かさが、愛おしかった。
　彼は、ぽつりとつぶやいた。
「ありがとう、マァム。
　・・・もう、ずいぶん前のことだ。
　どうしようもないことなんだ。」
　変えようのない過去の出来事であることはわかっていながらも、そう語る彼の声は悲しみが満ちていた。
　その音にならずに泣いているかのようなその声色が、マァムの胸に深く刺さった。鈍い痛みとともに。

　ネイル村の教会の神父は、十数年前までは、マァムの祖父のアリアムであった。しかし、魔王ハドラーとの戦いの際、アリアムの一人娘のレイラは教会の教えに反して村を出た。また、レイラの娘のマァムも、教会の僧侶としての修行は積んでいなかった。
　そのため、大魔王との戦いが終わった現在では、ネイル村の教会の神父を務めているのは、アリアムの甥の男性だった。マァムにとっても親族に当たる。
　マァムは、神父が代替わりをしても、教会には頻繁に訪れ、ミサの手伝いをしたり、教会の行う行事にも積極的に参加していた。
　この日、マァムは、いつものように、教会に神父を訪ねて来た。
「こんにちは、おじさん。」
　マァムが教会にやってきたのを認めると、神父は、笑顔で彼女を出迎えた。
「やあ、マァム。」
　マァムは手に持った籠を神父に差し出すと、レイラからの託を伝

えた。
「はい、おじさん。母さんから。パンを多めに焼いたから、教会の皆さんでどうぞって。」
「いつもありがとう。
　レイラにもお礼を言っておいてくれ。」
「うん。」
　マァムは教会の中を見回すと、神父に尋ねた。
「今日はおじさん一人なの？」
　神父は、首を横に振って答えた。
「もうすぐみんなやってくるよ。今日は聖書の勉強会もあるからね。」
「そうなんだ。」
　マァムは神父と言葉を交わしながら、さらに彼に尋ねた。
「あのね、おじさん、ちょっと聞きたいんだけど・・・。」
　マァムは、神父もよく知っている男性の名をあげた。マァムの問いを聞いた神父は、少し意外そうな顔をすると、彼女に答えた。
「ああ、彼なら、今度来るのは来週かな。
　何か用なのかな？」
　すると、マァムはひどく真剣な面持ちで、神父に頼んだ。
「うん。おじさん、お願いがあるの。
　今度、あの人が来たら、教えてくれる？」
　マァムの頼みに、神父は快くうなずいた。
「言っておくよ。マァムが会いたがっているってね。」
「お願いね。」
　依頼を快諾してくれた神父に対し、マァムは笑みを向けた。
　そして、彼女は声を落とすと、神父に頼んだ。
「あ、あとね、おじさん。
　このことは、他の人には言わないでくれる？特にヒュンケルには。」
　すると、神父は、今度は目を丸くしてマァムを見返した。
「かまわないけど・・・ヒュンケルにも？」
　マァムは、ためらいがちにうなずいた。
　神父は、マァムの様子を意外に思い、彼女に尋ねた。

「・・・何か、訳があるのかな？」
「・・・いまはちょっと・・・。」
　だが、マァムは言葉を濁した。はっきりと答えない。
　神父は、彼女の心情をくみ取ると、それ以上のことは尋ねることはしなかった。
「わかった。このことは私の心の中に留めておくよ。」
「ありがとう、おじさん。」
　マァムは、頼みを聞き入れてくれた神父に礼を述べた。

　この日は、ヒュンケルは、村の塾で子どもたちに剣を教えていた。
　もともと知識層であり、様々な稀有な経験を経ていたヒュンケルは、村からほとんど出たことのない村人たちにとって、得難い人材であった。そんな彼は、村ではかなり重宝されており、様々な頼まれごとを受けることが増えてきていた。
　この日も、村の広場で、この村の教育機関である塾の子どもたちに、剣や軽い身のこなしを教えていた。
「よし、今日はここまでにするか。」
　ヒュンケルが子どもたちに声を掛けると、子どもたちの間から疲れたような声が上がった。
「おわったー。」
「やったー。」
「つかれたねえ。」
　子どもたちが口々にそう言っていると、教師を務めている村の若い女性が、子どもたちに声を掛けた。
「はーい、みんな！片付けるわよ。
　ほら、ヒュンケルにも挨拶して。」
「はーい。」
　そう言って、子どもたちはひとかたまりになると、ヒュンケルに挨拶をした。
「ありがとうございましたー！！」
「ああ、お疲れ様。
　みんな、頑張ったな。」

ヒュンケルが、そう言って、小さな戦士たちの労をねぎらうと、子どもたちから嬉しそうな声が上がった。
　ヒュンケルも帰り支度をしていると、村の若者たちふたりが声を掛けてきた。ヒュンケルともよく話をする、彼よりも少し年上の大柄な青年と、年下の猟師の若者だった。
「お、お疲れ、ヒュンケル。いま終わりか。」
「ああ。今日は終わった。」
　大柄な青年は、広場の隅に集まって、帰り支度をしている子どもたちを眺めていたが、ふと、ヒュンケルの手元に視線を移した。ヒュンケルの手には、子どもたちへの指導で使った木刀が握られたままになっていた。
　大柄な青年は、懐かしそうに笑みを浮かべると、つぶやいた。
「剣の指導か。
　この広場でお前が木刀を持っていると、思い出すな。」
「・・・そうだな。」
　何のことを指しているのかすぐに察したヒュンケルも、うなずいた。
　ヒュンケルがまだアバンと旅をしていた幼い頃、ネイル村にしばらく滞在していたことがあった。そのときに村で行われた武術大会の決勝戦で、ヒュンケルと、この青年が相対したのだった。
　その話は、猟師の若者も聞いたことがあった。彼は、ふたりに尋ねた。
「あ、そうか、ヒュンケルと試合したことあるんだっけ。」
「子どもの頃にな。」
「ヒュンケルの方が小さかったのに、勝っちゃったってやつだっけ？」
「引き分けだ！」
　憮然として、大柄な青年が答えると、ヒュンケルは苦笑した。
「そうだな、引き分けだったな。」
　大柄な青年は、ヒュンケルの言葉に、羞恥で顔を赤らめた。そして、居心地が悪くなったのか、彼は、話題を変えた。
「・・・あ〜っと、もう帰るのか？」
　すると、ヒュンケルはうなずいた。

「そうするつもりだ。
　今日は、マァムが遅くなると言っていたから、先に帰ろうと思ってな。食事の支度もある。」
「・・・お前って、本当に、何でもできるのな。」
　大柄な青年が、感心と呆れの混じったような声を上げると、猟師の若者が嬉しそうに声を上げた。
「あ、なら、ちょうどいいや。この前さばいたイノシシがあるから、持っていくよ。保存用に燻製にしたやつだけど。」
「助かる。
　いつもすまないな。」
「この前、ふたりに手伝ってもらって燻製にしたやつなんだよ。まだ余っているから、いいよ、いいよ。大型の獣はみんなで食べないと、食べきれないじゃないか。」
　小さな村なだけに、こうしてお互いに融通し合うことは珍しくはないのだが、これまで一人で生きてきたヒュンケルにとっては、目新しいことばかりだった。
　もう一人の、ヒュンケルよりも年上の大柄の青年が、彼に尋ねた。
「マァムはどこかに出かけているのか？」
「いや・・・行先は聞いてないが。レイラさんの往診を手伝ったあと、寄りたいところがあると言っていた。村の外に出るとは言っていなかったが。」
　すると、猟師の若者が声を上げた。
「え？マァム？
　さっき、教会にいたぞ。」
「教会？」
　ヒュンケルが尋ね返すと、年上の青年が彼に問うた。
「聞いていないのか？」
「・・・ああ。」
　年上の青年は、ヒュンケルのその言葉に、わずかな違和感を覚えたようだった。彼は、それ以上、尋ねなかった。
　マァムが村の教会を訪れることなど、珍しくもない。それなのに、ヒュンケルに告げていない上に、遅くなると話していたとい

う。そこに、彼は違和感を覚えた。
　それは、ヒュンケルも同様だったのだろう。何か考え込むような仕草で、わずかな動揺がその面に上っていた。
　だが、猟師の若者は、何も気づかず、さらに言葉をつづけた。
「いま、教会に、絵描きが来てるんだよね。若い絵描きの男。
　マァム、そいつに用でもあるのかな。なんか話していたよ。」
「・・・そうなのか。
　絵描きの男が来るのは、よくあることなのか？」
「たまに。」
「マァムも、面識のある者なのか？」
「・・・そりゃあ、まあ。
　俺も知ってるし。何度も見た顔だもんなあ。」
「何故それを・・・。」
　隠す必要がある？
　ヒュンケルは、そこで口をつぐんだ。
　淡々と言葉を交わしていたように見えたが、普段あまり感情を見せない彼の面が、青ざめたのをふたりは見た。
　猟師の若者は慌ててとりなした。
「あ・・・もしかして、聞いてなかった？」
「ああ・・・。」
　そう答えるヒュンケルの声は、明らかに強張っていた。猟師の若者は慌ててとりなした。
「あ、あ、あいさつでもしてたんじゃないかな。ほ、ほら、神父様、マァムの親戚だし。」
　だが、そのことばが聞こえているのかいないのか。
　ヒュンケルは、ふたりと視線を合わせないまま、ぽつりとつぶやいた。
「・・・そうだな・・・。
　マァムには、マァムの事情があるんだろう。」
　そう言いつつも、ひどく乾いた口調に、猟師の若者は、胸の内で、声にならない悲鳴を上げた。
　ヒュンケルを見送ると、彼は、傍らの年上の青年の袖を引っ張って泣きついた。

「・・・ど、どうしよう。俺、まずいこと言っちゃったかな・・・。」
　その様子に、もう一人の青年は、呆れた顔で空を見上げた。

　その日の夕食は、分けてもらった猪肉を焼いて、チーズに温野菜を添え、キノコのスープにした。燻製肉とチーズは、パンによく合う。マァムが帰るころには、すっかり夕食が出来上がっており、彼女は、ヒュンケルの作った食事に舌鼓を打っていた。
　マァムは、食事を終えると、ヒュンケルに礼を述べた。
「ありがとう、ヒュンケル。美味しかったわ。」
　その笑顔には何の憂いもなさそうで、そこに彼に隠していることがあるようには思えなかった。
　ヒュンケルは、食後のコーヒーをマァムに出すと、彼女に尋ねた。
「今日は遅かったな。」
「あ・・・うん。」
「どこに行っていたんだ？」
「・・・えっと。」
　ヒュンケルの問いに、いつもはすぐに返されるマァムの答えはなかった。どう答えるか言いあぐねている様子だった。
　さらに言葉を発したのはヒュンケルの方だった。
「教会に行っていたのか？」
「・・・あ。」
　マァムはそれでも答えない。
　ヒュンケルは、さらに問いを重ねた。
「いま、教会に、若い絵描きの男が来ているようだな。」
　その言葉に、マァムははっとして、ヒュンケルを見た。
　ヒュンケルの声は無機質で、そこから彼の感情は読み取れなかった。その目も、何も語ろうとはしていなかった。
　まっすぐに見据えられたその視線を受け止めきれず、マァムは、力なく、首を横に振った。
「ち、ちがうの・・・ヒュンケル。あなたが疑うようなことは何も・・・。」

「俺は何も言っていない。」
「あ・・・。」
　マァムは慌てて口をつぐんだ。そんな行動をすれば、余計にヒュンケルの猜疑心をかき立てるだけだ。しかし、マァムには、他の対応はできなかった。
　ヒュンケルは、極力感情を排しているのだろう。淡々とした声で、マァムに語り掛けた。
「マァム。俺は、お前を信じている。
　一緒に暮らしているからといって、何もそのすべての行動を話さなければならないというわけではないだろう。
　お前が、俺に顔向けができないようなことをしているとも思っていない。
　だが、何かを隠されているというのは、いい気分ではない。」
　マァムは、うつむいたままうめくようにヒュンケルに詫びた。
「ごめんなさい・・・。」
　だが、それでも、それ以上のことを語ろうとしなかった。
　ヒュンケルは、軽くため息を吐いた。
「・・・いま、言えないのなら、仕方がない。
　そのうち、話せるようになったら・・・教えてくれ。」
　マァムは、意を決したように顔を上げると、真摯な瞳でヒュンケルに訴えかけた。
「・・・お願い。もう少し待って。」
　その眼差しは以前と変わらない、真っすぐなものだった。ヒュンケルは、そのまま言葉を返した。
「待てばいいんだな。」
　すると、マァムはうつむき、小さくうなずいた。
　彼女の意図は見えなかった。それでも、ヒュンケルにはこう答えるしかなかった。
「わかった。
　お前がそう言うのなら、そうしよう。」
　胸に渦巻く感情はあったものの、ヒュンケルは、それ以上は彼女に何も詮索しなかった。

ふたりが話し合って２週間くらいが経っただろうか。
　この日、マァムは、満面の笑みで帰宅をした。
「ただいま、ヒュンケル！」
「お帰り。」
　この日も行き先を告げずにマァムは出かけていったが、教会に行っているであろうことは、ヒュンケルにもわかってはいた。
　何をしているのかは相変わらず教えてくれなかったが、今日の笑顔を見ると、どうもいいことがあったようだった。
　ヒュンケルはマァムに尋ねた。
「何か、いいことでもあったのか？」
「あ、わかる？」
「ああ。嬉しそうだな。」
「うん。やっと終わったの。」
「終わった？」
　ヒュンケルが不思議そうに尋ね返すと、マァムはヒュンケルに包みを手渡した。
「はい、どうぞ。」
　それは、少し硬い感触で、スカーフのような布地でくるまれていた。大きさは、本と同じくらい。だが、さほど厚みはなかった。
　ヒュンケルは、マァムに尋ねた。
「これは？」
「開けてみて。」
「あ、ああ・・・。」
　言われるがまま、ヒュンケルは、包みを説いた。
　そこに現れたのは、１枚のキャンバス画だった。
　小型のキャンバスに、絵が描かれていた。
　生き生きと描かれた鮮やかな色彩のその姿に、ヒュンケルは見覚えがあった。
　オレンジ色のつるりとした丸い頭に足のない独特の形状。とんがり帽子。
　もう何年も見ていないその姿が脳裏に蘇る。
　ヒュンケルは、我知らず、その名をつぶやいた。
「・・・バケル。」

すると、マァムは、嬉しそうに声を上げた。
「よかった！バケルに見えるのね！似ている？」
「あ、ああ・・・。」
　ヒュンケルは戸惑った声のまま、かろうじて頷いた。マァムは、そんな彼の様を認めると、いっそう嬉しそうに言葉を継いだ。
「私、絵ってあんまり描いたことないから心配だったのよ。いろいろな人にバケルのこと聞いて、こんな感じかなあって思って。
　でも、ヒュンケルから見てもバケルに見えたのならよかった！」
　その言葉に、ヒュンケルははっとして、マァムに尋ねた。
　つまり、この絵は。
「・・・マァムが描いたのか？」
「うん、そう。
　でも、私、絵の描き方がよくわからなかったから、教会のフレスコ画を直しに来ていた絵描きさんに教わったのよ。
　その人には褒めてもらったけど、うまく描けているか心配だったわ。」
　マァムの言葉に、今までの出来事が組み合わされ、まるでパズルが出来上がるように１枚の絵を描いた。
　ヒュンケルは、上ずった声で尋ねた。
「まさか・・・今まで教会に行っていたのは・・・。」
「うん。この絵を描いていたの。でも、うまくできるかどうかわからなかったからヒュンケルに言えなくて。ぬか喜びさせても悪いなあって思って。
　やっと見せられたわ。よかった。」
「・・・マァム。」
　ヒュンケルの胸の中を、この日までとは違う感情が渦を巻いた。だが、彼らしくなく、うまく言葉にできない。
　ヒュンケルは、辛うじて、ただひとことだけを、マァムに尋ねた。
「何故・・・この絵を？」
　すると、マァムは、憂いのない笑顔をヒュンケルに向けた。
「だって、子どもの頃のヒュンケルの友達だったんでしょう？だから、またバケルをヒュンケルに会わせてあげたいなあって思った

の。」
　マァムの言葉に、ヒュンケルは、彼女の思いを感じ取った。
　彼女は、どのくらいの時間をかけて、この絵を描いたのだろうか。人に教わりながら。
　どのくらいの手間をかけたのだろうか。この１枚のために。
　そして、彼女は、どれほど、ヒュンケルのことを考えてくれていたのだろうか。
　ヒュンケルは、目頭が熱くなるのを覚えながら、再び、キャンバスに視線を戻した。
　生き生きと描かれた、オレンジ色のゴースト。
　人を食ったような、悪戯っぽい笑み。
　鮮やかに描かれたバケルの脇に、小さな子どもの絵があった。
　銀の髪の少年と、花の色の髪の少女。
　ヒュンケルは尋ねた。
「この・・・子どもたちは・・・俺とお前か？」
「あ、わかってくれる？嬉しい。
　私たちも一緒に遊んでいたんでしょう？聞いたわ。だからなんか、一緒に描きたくなっちゃった。
　余計だったかな。」
　そう言って、マァムは少し照れたような笑みを浮かべた。
「・・・マァム。」
　ヒュンケルは、右手でキャンバスを持ったまま、左腕で、マァムを抱き寄せた。ふわりと、甘い香りが彼女の髪から広がる。
　その温かさに触れながら、ヒュンケルは、マァムの肩に顔を埋めた。
「マァム、バケルのものは、もう何も残っていないんだ。
　あいつは確かに存在していたはずなのに。俺たちは、１年もの間、一緒に旅をしていたはずなのに。
　いまはもう・・・何もない。
　あれは、夢だったんじゃないかと思うくらいに。」
　その声は、ひどく苦し気で、抑えられた涙が苦悩となって流れ出ていたようにも思えた。
　ヒュンケルは、言葉をつづけた。

「だが、こうしてお前が形にしてくれた。
　こうしてみるとあの頃を懐かしく思い出す。
　あいつは・・・確かに俺の隣にいたんだと・・・思うことができる。」
　マァムは、ヒュンケルの背に両腕を回した。何も言わず、ただ、彼を抱きしめる。
　その控えめな腕の力に、語られない言葉に、マァムのヒュンケルに対する心遣いが込められていた。
　ヒュンケルは、マァムに詫びた。
「すまない、マァム。余計なことを言った。
　お前は、いつだって俺のことを考えてくれていたのにな。」
　だが、マァムは、黙って、首を横に振った。彼を腕の中に抱きしめたまま、答える。
「ううん、私の方こそ、不安にさせてごめんなさい。
　でも、私も嬉しかったの。ヒュンケル。何も言えなかったのに、話せるようになったら話してほしいって、あなたが言ってくれて。私を信じてくれているんだなって思えて・・・。
　ありがとう、ヒュンケル。」
　マァムの慈しみを深く感じながら、ヒュンケルは思った。
　これまで、何度彼女に救われてきただろう。何度、自分を光の当たる道へと引き戻してくれたのだろう。
　その度に、マァムに対する深い感謝と、抑えきれない愛を抱いてきた。
　もうこれ以上愛せないと思うくらいに深く思ってきたというのに。
　ヒュンケルはぽつりとつぶやいた。
「参ったな・・・。」
「何が？」
「今までの、何倍も、お前が愛おしい。」
　不意に告げられた愛の言葉に、マァムは小さく声を上げた。
　マァムが見上げると、ごく近くで、ヒュンケルの暗灰色の瞳が穏やかに揺らぎ、微笑んだ。
「愛している、マァム。」

もう何度告げたかわからない、そのことばを口にした。

　幼い少年は、不思議そうな眼差しで、棚の上に置かれた１枚の絵を見上げていた。
　彼が物心ついた時から、その絵はいつもそこにあり、リビングで談笑する家族を見守るようなまなざしを注いでいた。
　だが、その中心に描かれていたのは、明らかに人間ではなかった。
　小さな少年少女と、最も大きく描かれているのは、オレンジ色のゴースト。
　少年が不思議そうにその絵を見上げていると、彼の父が声を掛けてきた。
「何を見ているんだ？」
　少年は黙って、絵を指さした。
　すると、父は、ああ、とため息のような声を漏らした。
　幼い少年は、父に尋ねた。
「とうさん、あれ、だれ？」
　すると、父は、ひどく優し気な目で彼を見下ろした。黙って彼を抱き上げ、絵の前に進んだ。
　少年の目の前に、あの絵が広がる。
　父は彼に尋ねた。
「よく見えるか？」
「うん。」
　そして、父は感慨深げにつぶやいた。
「あいつはな、父さんの友達だ。子どもの頃の・・・な。」
　そう言って、ヒュンケルは、懐かしそうに目を細めた。息子とともに、妻が描いたバケルと自分たちの遠い日の姿をその目に写しながら。
　キャンバスの中には、幼い日々の思い出が、色鮮やかに息づいていた。